

「食の安全ダイヤル」に寄せられた質問等について（7 月分）

（1）問い合わせ件数

平成16年7月1日～平成16年7月31日

114件

（2）内訳

① 食品安全委員会関係	31件
② 食品健康影響評価関係	32件
③ 食品安全基本法関係	0件
④ リスク管理一般関係 (うち食品表示に関するもの)	49件 (2件)
⑤ その他	2件

*うち、ヒジキ関係 58件、BSE関係 26件

（3）問い合わせの多い質問等

【食品安全委員会関係】

Q. 大規模な食品事故等の緊急事態において、食品安全委員会はどのような対応を行うのですか。

A. 食品の安全性に係る緊急事態に対しては、国民の健康への悪影響を未然に防止することが最も重要であるという認識のもとに、食品安全委員会及びリスク管理機関が十分に連携し、適切な対応を迅速に行うことが重要です。

このため、本年4月に、緊急事態等が発生した場合の国の対処のあり方等を定めた「食品安全関係府省緊急時対応基本要綱」が策定されたところです。この中で食品安全委員会は、リスク管理機関とともに、

- ① 緊急事態の発生に係る第一報を相互に迅速に通報する
- ② 緊急時対応のための体制の確立及び対応策の決定等を迅速に行う
- ③ 緊急事態に関する情報の収集・整理・分析を迅速に行うとともに、相互に情報共有を行う

こととされています。

また、食品安全委員会は、緊急事態に関する通報を受けた場合などにおいて、食品安全委員会委員長が必要と認める時には、食品安全担当大臣に迅速に報告することとなっています。これを受け食品安全担当大臣は、関係各大臣等と協議を行い、必要に応じ、緊急対策本部を設置し、政府一体となって危害の拡大や再発の防止を図ることとなります。

【食品健康影響評価関係】

Q. 英国食品基準庁がヒジキに無機ヒ素が含まれているとして、食べないように注意喚起していますが、ヒジキの安全性について教えてください。

A. ヒジキに無機ヒ素が、他の食品に比べ比較的高濃度で含まれていることが文献などで報告されています。ヒジキについては、伝統的な食材として古くから食べられておりますが、これまでにヒジキを食べてヒ素中毒を起こすなど健康に悪影響が生じたとの報告はありません。ヒジキを極端に多く食べない限り、健康上のリスクが高まるとは考えられません。

また、海そう類はミネラルに富む食品であり、健康維持のためには、これらをバランスよく食べることが重要です。

(参考)

- 1 ヒジキ中のヒ素に関するQ&Aが、厚生労働省のホームページ(<http://www.nihs.go.jp/hse/food-info/mhlw/news/040730/040730a.pdf>)に掲載されています。
- 2 ヒジキ中のヒ素に関する食品安全委員会からのこれまでの掲載情報については、食品安全モニターからの報告（平成15年10月分）の3ページを御覧下さい。
(<http://www.fsc.go.jp/monitor/1510moni-saisyuhoukoku.pdf>)

Q. ジャガイモに含まれるソラニン中毒の発現量について教えてください。

A. ソラニンはジャガイモの発芽部分や緑色部分に含まれる有毒な物質（ステロイド系アルカロイド配糖体、 $C_{45}H_{73}NO_{15}$ ）として古くから知られているものです。

典型的な中毒症状としては、食後数時間後発症し、腹痛、胃腸障害、虚脱、めまい、ねむけ、軽度の意識障害があります。

ソラニン中毒の発現量に関してですが、文献（注1）によれば、ヒトの中毒量は25mg、致死量は400mgとの指摘があります（ウサギの経口試験によるLD₅₀（半数致死量）（注2）は、450mg／体重kg）。

（注1）「食中毒（細貝祐太郎、松本昌雄監修）中央法規」による。

（注2）LD₅₀は化学物質の急性毒性の指標で、実験動物集団に経口投与等により投与した場合に、一定日数以内にその実験動物集団の50%が死に至る量をいいます。

【BSE関係】

Q. 食品安全委員会で我が国におけるBSE対策全般についての科学的な検証が行われているとのことですが、どのような議論がされているのですか。

A. 食品安全委員会においては、平成15年8月の第1回プリオン専門調査会において、「日本のBSE問題全般について議論することが重要である」とされ、本年2月から種々の情報収集、海外専門家からの意見聴取などを行い、調査審議を進めてきており、7月16日の第12回専門調査会において、日本における牛海綿状脳症（BSE）対策について報告書たたき台の審議がなされたところです。

本たたき台にも示されているとおり、ここでの審議は、「わが国でBSE感染牛が確認されて2年半が経過し、・・・現在までに得られたデータや知見を踏まえ、vCJDのリスクの低減効果から、わが国におけるBSE対策（管理措置）をレビューし、今後の対策に活用することが重要」との考えから検証しているもので、見直しを前提とするものではありません。

Q. BSEについては、異常プリオンがその原因と考えられるようですが、なぜ、危険部位にしか蓄積しないのですか。例えば、血液や牛乳には含まれることはないのですか。

A. 現在までの知見では、異常プリオン蛋白は、特定危険部位（SRM）とされる脳、目を含む牛の頭部（舌及び頬肉を除く。）、せき髄、回腸遠位部、背根神経節にBSE感染牛の体内の99%以上が蓄積されていることが分かっております。なお、英国でBSE感染牛の各組織をマウスの脳内へ接種した実験でも、筋肉、心臓、肝臓、肺、食道、胃、小腸（近位、遠位）、結腸（近位、遠位）、直腸、血液、乳などでは感染性が検出されていません。